

平成二十四年

「路」年間賞

選考委員

浅岡 水城／内平登代子／加藤 佳子／小泉 正巳
酒井 利明／佐々木彩乃／佐藤 頼昭／高橋里江子
瀧 正治／二宮 茂男／藤原 和美／金子美知子
(計十二名)

最高賞(賞状・入賞句彫刻楯)

流木になって大河の声を聞く

木村 紀夫

◎水城 ◎利明 ○正治 ○和美

優秀賞(賞状・入賞句彫刻楯)

虫籠に虫一匹の野原買う

大石多美恵

◎正巳 ◎里江子 ○水城 ○頼昭

次点

赦そうと思ってしまう熱い飯

荻原 鹿声

◎佳子 ◎里江子

以下高点順

自画像に錆びた画鋏が纏い付く

坂本 嘉三

◎正治 ○彩乃

脱皮した蝶に持たせる白い地図

高橋里江子

◎正治 ○頼昭

生きている実感石を抱かされる

伊藤 我流

◎茂男 ○登代子

日の丸の裏に潜んだ罪と罰

神宮寺茂太

☆美知子

額縁の外でのんびり平泳ぎ

荻原 鹿声

☆美知子

したたかな蝉だ寿命を知っている

角田 誠

○佳子 ○利明 ○里江子

日の神が原発という賽を投げ

阿部 文彦

○美知子 ○登代子

魂を磨く光りのあるうちに

渡部トミ子

○美知子 ○和美

生きてゆく添え木となった詩がある

渡部トミ子

◎水城

釘一つ打たれたままで父を追う

飯田サイコ

◎登代子

雪抱いてプラス思考が重くなる

大黒谷サチエ

◎登代子

怒り玉ポンポンあがる国中に

鳥居久美子

◎佳子

痒すぎるギプスの下も春である

大黒谷サチエ

◎正巳

故郷へ埋める詩集を編んでゆく

荻原 鹿声

◎利明

ヒロシマを越える片仮名でてしまい

荻原 鹿声

◎彩乃

檜山の地図に夕日を当てて置く

瀧 正治

◎彩乃

日和見の風に背中を渡さない

藤原 和美

◎頼昭

自我たたみ袋小路を突き抜ける

佐々木彩乃

◎頼昭

蟻一匹死んでも列は乱れない

原 新平

◎茂男

無風帯この環境になれすぎる

大橋 政良

◎和美

沖縄はなお戦場の臭いする

松方 尚義

◎和美

疑いの晴れてつるとゆで卵

富岡 桂子

◎水城 ○茂男

人になる人になろうと墨を摺る

松村 華菜

◎正巳 ○頼昭

エプロンの汚れ我慢を拭いた跡

平沢やす子

◎正巳 ○里江子

手の中に入る程度の空でいい

伊藤 我流

◎利明 ○彩乃

常に欲透ける人間らしい顔

神宮寺茂太

◎正治 ○茂男

列島に何があろうが桜咲く

高橋里江子

○美知子

合う土を選んで伸ばす子の未来

加藤ゆみ子

○美知子

踏んばっています流れに棹さして

松村 華菜

○美知子

生意気な餡パンへそにまで化粧

妹尾 安子

○水城

八月の大地は水を吸いつくす

平沢やす子

○水城

無位無冠 秋の睡魔の姿よし

藤原 和美

○水城

爪を切り了える妻には妻の花期

小幡 完治

○登代子

踏み出した一歩猿には戻れない

平沢やす子

○登代子

合わぬ靴履きぬき孫に恵まれる

原 新平

○登代子

雑草の中で雑草枯れている

飯田サイコ

○佳子

嫌なもの呑むなと風の処方箋

二宮 茂男

○佳子

渴く世に月のウサギを呼び戻す

横田 茜

○佳子

国を絆の文字が駆け巡る

岩澤 柳歌

○佳子

この星に生きた証の咳払い

加藤 胖

○正巳

仙人のヘソが笑った自然食

大橋 政良

○正巳

追憶の欠片を手繰る地引網

木村 紀夫

○正巳

励ますとペースが落ちる老いた亀

二宮 茂男

○利明

川底で叫んだ頃もあった石

常石 麗子

○利明

空白の日記の裏にある悲哀

井口 昌一

○利明

音程はどうしましょうか除夜の鐘

小泉 正巳

○彩乃

八月の雲から伸びる糸電話

藤原 和美

○彩乃

おもちゃ箱夢がこぼれた煮えていた

松村まさこ

○彩乃

炎え尽きる時に注ぎ足す肋の火

瀧 正治

○頼昭

川汚し海を汚して人が病み

二宮 茂男

○頼昭

靴下を脱いで己にもどる蟻

芹沢美知子

○里江子

鉛筆がとがったままに黄昏れる

飯田サイコ

○里江子

いいことをつなぎ合わせて春を待つ

阿部 文彦

○里江子

着ぐるみを離せぬ骨のないオトコ

富岡 桂子

○正治

原石のまま埋もれてゆくあせり

大橋 政良

○正治

歳月が枯葉になって散る峠

木村 紀夫

○正治

溜め込んだ力一気に解く蕾

加藤ゆみ子

○茂男

やり遂げぬ仕事に食らう背負い投げ

木村 紀夫

○茂男

長命の眉に悩みがぶら下がり

山口 凱久

○茂男

夏草に兵士の行方聞いてみる

小安 湖雪

○和美

草の根が大地をつかみ離さない

渡辺 誠也

○和美

渡り鳥そこは警戒区域だよ

三島 大二

○和美

選考の経緯・方法は次の通りです。

一、選考対象句は、「路」誌576号（平成二十四年一月号）～587号（平成二十五年一月号）の推薦句。

二、選考委員は、七句（特選二句 各三点、佳作五句 各一点、但し、主宰はそれぞれ一点を加算する）を推薦する。

合計点の高い順に、最高賞、優秀賞各一句を主宰が決める。上位が同点の場合は、主宰が一句に決定する。前記の資料を「編集幹事会議」へ提出して確認を得た。

受賞の言葉



木村 紀夫

「油蟬お前そんなに悔しいか」二十年前の自作です。世の中から取り残されたような鬱屈した感情が、そんな句となったのだと思います。そのころに比べると、いまは歳相応に心も落ち着いています。

社会という大海の中で、ゆったりと波音に耳を傾けながら、それでも自我だけは守っていきたいと思います。選考委員の皆様には感謝申し上げます。



大石多美恵

川柳友の会にて勉強中、北海道千歳市に移り住む事になり十四年過ぎました。「孤独な自由山笑う」と自

然を楽しみ、川柳を愛しむ日々の中、「野原の虫」にふつと横浜と千歳が連鎖してうまれた一句の受賞の知らせに驚きと喜びが重なり、身に余る光栄に感謝します。ありがとうございます。

選考して戴き御礼申し上げます

年間賞の歴史

金子美知子

「路」平成二十四年度年間賞の最高賞、優秀賞作品が掲載発表の通り決定した。

一九七六年に発足された年間賞の歴史は古く、今年で第三十七回となる。一昨年は第一回受賞作品、昨年は第二回から五回の受賞作品を紹介した。今号は第六回からを左記に紹介する。

第六回

- トンネルに溢れる予想屋の帽子 須田 尚美
- イソップの皿に手負いの母眠る 横田蛙太郎

第七回

○ちちははが置き石をする縄電車

佐久間太陽

○少しづつ背くおとこの冬帽子

黒澤かかし

第八回

○ひまわりの種ひとつづつ海を吐く

奥野 誠二

○火傷する予感の中で逢いにゆく

小野 富代

心の機微を詠み、読み手を感動させる作品。社会を見つめ訴える作品等、幅広い表現で個性を重んじている。

「路」の姿勢を、歴代の受賞作品からも感じ取れる。

今回、対象となった同人・誌友作品ともに佳句であり、点数で位付を決められることではないが、選者の確かな鑑賞力で選ばれたと確信している。

受賞された紀夫氏、多美恵氏おめでとうございました。